

な3つの要素は、1)自分たち親子は、かけがえない真の親子であると確信すること、2)お互いの気持ちに共感しあい、お互いを必要とし、助け合うこと、そして、3)それぞれの問題(子どものアイデンティティー形成の困難さなど)を話し合い、理解するコミュニケーション能力を持つことである。

4. 目的

この意識調査の目的は、第一に、人々のどのような考え方を今後強めれば児童福祉の一環としての養子縁組を日本で促進させることができるかをみることであった。

日本の人たちは、養子縁組当事者、つまり産みの親、養子、養親の、それぞれのの気持ちに共感し、また彼らのニーズを理解できているのだろうか、あるいは、血縁重視の考え方が強く、無血縁者間の養子縁組には踏み出しにくいと思っているかを明らかにしたかった。

第二の目的は、一般の人たちと専門職の人たちは養子縁組プロセスのタイプ①クローズドアダプション、②セミアダプション、③オープンアダプションの内のどのタイプを好むかをみることであった。そのために、一般市民と専門職の人たちの意識と、セミオープンアダプション形式ですでに養子縁組にかかわっている当事者(養親と産みの親)の意識との比較を試みた。

今回は、【図1】に示した54の関数の内灰色で示した部分、すなわち、養子、養親、産みの親それぞれの自己内面(養子縁組前・中・後)、また、環境側面としては、当事者三者それぞれの対人関係(養子縁組前・中・後)と社会文化的関数(養子縁組後)の計21ブロックにわたって調査した。

今回の調査では、次の三つの仮説をたてた。

仮説1. 子どものための養子縁組に対する好感度は、一般の人たちと当事者の間に差がある。

- (1) (a)養子縁組の当事者である養親と産みの親と、(b)非当事者(一般市民と専門職の人たち)の、それぞれの養子縁組に対しての好感度に差がある。

- (2) 養子縁組当事者(産みの親、養親

と養子)の気持ちに対する、(a)当事者と(b)非当事者の共感度に差がある。

仮説2. 一般に日本では、オープンアダプションに好感をもたれないだろう。

言い替えると、(a)非当事者と(b)当事者の間で、産みの親、養子、養親の間に何らかのコミュニケーションがある方がよいと思う度合いに、差がある。

仮説3. 血縁関係を重要視する社会の中で、養親子にハンディキャップがある(Kirk, 1984)ことに対する共感度をみると、(a)当事者と(b)非当事者の間に差がある。また、(a)当事者と(b)非当事者には、そのハンディキャップに対して否定的に対処することに共感する度合いに差がある。

II. 方法

1. 調査対象

本調査の対象者は、次の三つのグループで、合計549名を選んだ。その内訳は次の通りである。

1. 専門職として全国175の児童相談所の里親/養子縁組担当ワーカーそれぞれ一名
2. 一般市民として聖母学院小学校ならびに聖母女学院短期大学の保護者合わせて192名
3. 養子縁組の当事者として、環の会の養親夫婦80名(夫婦40組)と産みの親30名

2. 被験者の選択

専門職のサンプルとして、全国175の児童相談所で里親・養子縁組担当をしているワーカーを選んだ。日本では、児童福祉相談所が公立養子縁組斡旋機関にあたる。

一般市民のサンプルとして、聖母学院小学校児童および私立短期大学の学生の保護者に調査協力して下さるようお願いをした。その結果、小学校4年生全員164名の保護者と、聖母女学院短期大学1回生ならびに2回生の保護者の名簿から100名を無作為抽出し、計264名を選んだ。

また、養子縁組当事者にあたる産みの親と養親には、現在実際にセミオープンアダプションを実施している環の会の養親(環の会では「育ての親」